

## 卒業式に「旅立ちの日に」が歌われるようになった訳

おはようございます。

今日は、最初にDVDの映像を見てもらいたいと思います。

これは、皆さんがよく知っている「旅立ちの日に」という曲ですね。歌っていたのは、この曲の作詞者である埼玉県秩父市にある影森中学校の小嶋登校長先生です。ニュースで見た人がいるかもしれませんが、今年1月20日にお亡くなりになり、改めて「旅立ちの日に」が卒業式で歌われるようになった訳が放送されました。私は、この曲を編曲した松井孝夫という先生とは葛飾区と板橋区で音楽科の研究を共にした仲だったので、この作品ができた当時のことをよく覚えています。

さて、この「旅立ちの日に」が生まれたのは、今から20年前の影森中学校の三年生を送る会、当時の小嶋校長先生が作詞して、音楽科の坂本先生がメロディーと伴奏を作曲しました。画面にあったように先生たちから卒業生に贈る一回きりの歌だったそうです。しかし、その年の春、松井先生によって混声三部合唱にアレンジされ、各地の合唱の指導者講習会で発表され全国に広がっていき、卒業式で一番歌われる曲となっていきました。

当時の影森中学校は、いじめや校内暴力など生活指導が大変な学校で、生徒たちの心も暗く、校歌も半分くらいの生徒しか歌わない状態だったそうです。「歌が歌えないのは心が不健康だ」と考えた小嶋校長先生は、なんとか学校の雰囲気を変えようと、「今日から歌声の響く学校を目指そう」と積極的に合唱に取り組む教育が始まりました。最初は、音楽の坂本先生の指導も泣きながら生徒に向かい合うこともあったようですが、「歌うことが恥ずかしい」から「歌うことって気持ちいい」と変わるように熱心に取り組み続けた結果、徐々に生徒たちに変化が現れたそうです。生徒たちの心に素直に入っていったこの曲を、今度は生徒が卒業する際に歌うようになり、「歌声の響く学校」に変わっていきました。

私は、2番の歌詞の「意味もないいさかいに ないたあの時 ころるかよったうれしさに抱き合った日よ」にこの校長先生の思いを強く感じました。そして、伝えたいことがあれば、言葉だけではなく、それをメロディーに託すことによって、より強く伝えることができる、音楽って本当に素晴らしいものだなとあらためて思いました。

本校の三年生を送る会や卒業式でも「旅立ちの日に」を歌います。今日の話を心の片隅において、「歌うことって気持ちいい」と思えるくらい体育館いっぱいに響き渡る歌声で、心を込めて歌ってください。